

毛里和子、増田弘監訳 岩波書店

『周恩来 キッシンジャー機密会談録』

(早稲田大学) 青山 瑠妙

1971年7月15日に発表された「アメリカ大統領ニクソンの訪中声明」によって、長期にわたり対立していた米中の和解が実現し、世界を震撼させた。同声明発表のわずか1時間前にロジャーズ國務長官から日本政府に伝えられ、頭越しに行われていた米中交渉は日本にも大きなショックを与えた。

1972年2月、ニクソン大統領のアメリカ大統領としての初めての訪中は、「世界の流れを変えた」と称されるほど、アジア、そして世界の冷戦構造に大きな変化をもたらした。1969年から、ニクソン政権はベトナム戦争の收拾に向けニクソン・ドクトリンを採用し、米中和解へ動き出した。同じころ、国際戦略関係を研究するようにとの毛沢東の指示を受けた陳毅ら「四元帥」が、「中米関係打開」の可能性についての報告書を提出した。このような両国の思惑を背景に、双方はパキスタンとルーマニアを通じたルートで秘密接触を続けた。1971年4月の「ピンポン外交」によって両国関係は急速に進展、さらにキッシンジャー（アメリカ国家安全保障問題担当大統領特別補佐官）の2度の訪中などを経て、1972年2月ニクソン訪中が実現し、20数年続いていた米中の緊張関係は緩和された。

このような一連の米中和解のプロセスの中で進められた米中接近を理解する上でカギとなるのが、いうまでもなくキッシンジャーとニクソンの訪中である。電子情報自由法に基づき、1990年代末ごろからキッシンジャー、ニクソン訪中の会談記録がアメリカで徐々に機密解除されたことにより、米中接近の全貌が現在明らかとなった。そして『周恩来 キッシンジャー機密会談録』は、こ

の一連の重要なプロセスの一つである、1971年のキッシンジャー訪中の全記録を日本語に翻訳した学術資料集である。

同書には、1971年7月のキッシンジャーの極秘訪中時の会談記録5件、同年10月訪中時の会談記録10件、72年1月キッシンジャーの側近であるアレクサンダー・ヘイグ准将（国家安全保障問題担当副補佐官）訪中時の会談記録2件、および関連の諸文書4件、合計21件の文書が和訳され、収録されている。

第1部の「キッシンジャー補佐官の1971年7月の訪中」は、7月9日から11日に行われた計5回、延べ17時間に及ぶ、キッシンジャー補佐官と周恩来や葉剣英（中央軍事委員会副主席）との交渉全記録、キッシンジャー米大統領補佐官訪中についての公告を翻訳したものである。

同書収録資料によると、7月の会談には二つの目的があった。一つはニクソン大統領の訪中に関する準備。もう一つは、台湾、インドシナ、南アジア大陸、軍備管理など世界情勢に関する意見交換を行うことである。この目的を背景に、周恩来とキッシンジャーの会談において、台湾問題、インドシナ問題が重点協議要項であったが、ソ連、日本、朝鮮半島、インド、パキスタンなど多岐に渡る問題に関しても意見交換が行われた。

「この問題が解決されなければ、すべての問題の解決は困難になるでしょう」という周恩来の発言（11ページ）に端的に表れているように、中国にとって米中交渉を進める上でもっとも重要な問題は台湾問題であった。「台湾は中国の一部」、「中華人民共和国を中国を代表とする唯一の合法政府」を含めた「台湾四原則」を承認し、「一定の期間に、台湾と台湾海峡に存在するすべての軍隊を撤退させ、すべての軍事施設を撤去させる」という中国の要求に対し、キッシンジャーは「台湾防衛にかかわらない三分の二の駐留兵力を、インドシナ戦争が終了して定められた短期間内に撤

退させ、残りの兵力を削減してもよい」と約束した。また「二つの中国」、「一つの中国、一つの台湾」を擁護せず、「台湾独立運動を支持しない」立場を表明し、大統領の二期目の早い時期に中国を承認する、といった方針も示された。他方、キッシンジャーは「二重代表制提案」によって生じるであろう国連における一時的な「一つの中国、一つの台湾」状況について理解を求めた。

インドシナ問題においてキッシンジャーはベトナム戦争の離脱を目的とする戦略を説明し、周恩来は「インドシナにおけるすべての外国軍の撤退」、「インドシナ三国人民だけによる自身の運命の決定」との原則を示した。

日本については、周恩来は経済成長が必然的に軍事的拡大につながるとの認識に基づき、日本に対する懸念をあらわにした。これに対し、キッシンジャーは日本における米軍の駐留、日米安全保障条約が日本の軍事大国化への抑止力を発揮することができるという、「ビンのふた論」を展開した。

第2部の「キッシンジャー補佐官の1971年10月の訪中」は、1971年10月20日から26日に行われた計10回、延べ24時間に及ぶキッシンジャーと周恩来の全会談記録、米中共同コミュニケ中国側第3次草案（1971年10月26日）、米中共同コミュニケ最終草案（暫定草案、1971年10月26日）を翻訳したものである。10月の交渉において、ニクソン大統領訪中日程、コミュニケ草案について協議したほか、台湾問題、日本、朝鮮半島の情勢、印パ問題、中東などについても意見を交わした。周恩来は台湾駐留米軍の最終撤退期限の明確化を要求し、外交関係樹立の前提条件はすべての軍隊の撤退および軍事施設の撤去という原則を改めて強調したが、キッシンジャーは7月で示した台湾問題に関するアメリカの原則を繰り返し、台湾問題に関する踏み込んだ表現をコミュニケの文面に盛り込むことを拒否した。他方、キッシンジャーはベ

トナム問題における中国の協力を求めたが、周恩来は拒否した。また10回にわたる10月の米中交渉の場において、日本問題に関する7月の応酬が幾度も繰り返された。

第3部の「ヘイグ准将の1972年1月の訪中と『上海コミュニケ』」は、1972年1月3日と7日に行われた計2回の全会談記録、ニクソン大統領の訪中に際しての米中共同コミュニケ（上海コミュニケ、1972年2月28日）を翻訳したものである。この交渉記録で新たに明らかになった事実は二つある。一つは、交渉の場においてヘイグ准将はソ連に関する情報を中国に無条件に提供することを約束した。もう一つの新しい情報は、アメリカの国内政治情勢の説明を受け、中国が米中貿易条項を共同声明に挿入することに同意したということである。

同書の最後に、監訳者の一人である毛里和子氏による解説が18ページほど付されている。同解説において、収録文献について概説した後、米国の対中交渉戦略、中国の対米8原則、台湾問題、米中の日本認識、周恩来と毛沢東の関係という視点から収録文献を解説した。

ニクソン訪中の道筋をつけたキッシンジャーの2度にわたる訪中で行われた交渉の全記録を収録した同書は以下のような特徴を有している。

同書を通じて、当時のキッシンジャーと周恩来のやり合いをリアルに読み取ることができ、それまで断片的にしか知られていなかった当時の米中接近の全貌が明らかとなった。台湾問題でのアメリカの譲歩など、それまで知りえなかった貴重な情報は同書によって多数披瀝されている。また、以上のような文献内容からわかるように、同書に収録されたキッシンジャーと周恩来の会談においては、インドシナ問題、台湾問題、日本、ソ連、朝鮮半島、印パ問題、カンボジア問題、欧州、中東など世界情勢に関する広範な意見交換が米中の間で行われた。ここで示されたこれら諸問題に対

するキッシンジャー、周恩来の意見は当時のアメリカや中国の対外戦略を理解する上で極めて貴重な資料であるといえることができる。

文献の最後に付された毛里和子氏の解説は非常に特徴的で、専門性の高いものである。米国の対中交渉戦略、中国の対米8原則、台湾問題、米中の日本認識、周恩来と毛沢東の関係という5つの視点に関する毛里氏のアプローチにより、同書で収録された資料に依拠しつつ、中国やアメリカで公開されている他の資料と照らし合わせながら、米中関係、特に中国外交史研究における新しい視点が提示されている。

他方、同書を利用する上でいくつかの点において注意を払う必要もある。

まず、同書は米中の会談記録を収録した構成となっている。実際、同書が基本的に依拠したウィリアム・バー氏が編集した2冊の電子本には、新しい事実を発掘できる貴重な文書がほかに多数ある。ウェブ上容易に確認できるこれらの電子本は、同書で示された資料に対する正確な理解の手助けとなる。

外交は交渉による国際関係の処理であり、外交官の職務であり技術である。つまり、交渉を通じて、相手の論理に合わせていかに相手を説得し、相手から譲歩を引き出すかが外交である。同書の資料を通じて、国際戦略に関する米中両国の基本的立場は示されているが、語られた個々のスタンス表明はそのまま鵜呑みにすることなく、本音か説得論理かを識別する目が求められる。これらの資料を相対化する上でも、アメリカや中国、ベトナムで公開されながら同書に収録されていない他の文献資料と照らし合わせて読む必要があるのではなかろうか。

米中接近にかかわる重大な交渉をタフに成し遂げた周恩来は「まことに希有の外交官である」と毛里氏が賞賛している(358ページ)。しかし、評者の目には、キッシンジャーに説得され、キッシン

ンジャーの意見に理解を示し、容認する姿勢を見せる周恩来の姿のほうに鮮明に映し出されている。読者によって、そして読者の問題関心によって異なる感じ方や、新たな収穫を提供してくれるのが同書の魅力である。現在の米中関係に横たわる大きな摩擦要因の一つは依然として台湾問題である。この意味で同書は、単なる歴史ではなく、現在にもつながる問題を語っている貴重な学術翻訳書であると評価できよう。

(2004年2月刊, 390ページ, 5,775円)